ぷーち島

sYnya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぷーち島

【Ｎコード】
Ｎ７６３９Ｈ

【作者名】
ｓＹｎｙａ

【あらすじ】
虹色の玉を探すために旅に出たパペッチュ。良い仲間達と出会えるのか？

第1話　パペッチュ誕生！

第1話
「パペッチュ誕生！」

ガ・ガ・ガ・ガ・ガ・ガ・ガ・ガ

ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴー・・・

「うわー」

「逃げろーーー」

・・・・・・・・・

パペッチュ「とりゃあー」

ピカコ「はっ」

ドコッ！

パペッチュ「うわっ」

ドサッ

ピカコ「だぁー！」

ドッ

パペッチュ「へへ」

ピカコ「！」

パペッチュ「たあっ！」

ドッ

ピカコ「ふっ！」

ダッ！　ドダ

ピカコ「パペッチュも結構強くなったなぁ、ピカチャンのパンチを止めるなんて。」

パペッチュ「だってずっとピカチャンと修行してたもん。」

ピカコ「まぁ、まだまだ弱いけどやっと一人で旅には出れるかな」

パペッチュ「ほんとにっ？、やったぁ！」

ピカコ「死なないようにな（笑）」

パペッチュ「パペッチュ強くなるから大丈夫、それよりピカチャン痩せたほおがいいよ？」

「パペッチュのパンチガードして、そのまま腕で地面押さえて着地した時、

ピカチャンが重いから地面が“ドダ”ってゆってたよ？」

ピカコ「そんなことはほっといたらいいんだよ！（汗）」

「それより、明日からもお旅に出るんだったらそろそろ寝ないとな」

パペッチュ「まだ４時なのに？・・・」

「あっ！　そっか！」

ピカコ「そおゆうこと」

「ぢゃあもお飯食って寝るか」

パペッチュ「うん」

・・・・・・・・・・・・・・・

パペッチュ「うーん」

「やっぱり背伸は気持ちいいなぁ」

ピカコ「おはよ、パペッチュ」

パペッチュ「おはよ」

ピカコ「支度は終わってるのか？」

パペッチュ「終わってるよ」

ピカコ「ぢゃあそろそろ行けよ」

パペッチュ「うん、パペッチュ仲間集めて皆で虹色の玉探すんだぁ！」

ピカコ「何回も聞いたよ（笑）」

「ぢゃあな」

パペッチュ「よっこらせ」

「重たいリュックだよ」

「んぢゃね～、ピカチャン。」

ピカコ「ぢゃあな～、あっそおだこれっ！」

フッ　パシ

パペッチュ「何？この白い玉」

ピカコ「それはお前の玉だよ」

パペッチュ「えっ！？　パペッチュも玉持ってるの！？」

ピカコ「そおだよ」

パペッチュ「やったぁ！」

ピカコ「それは持ってるだけでお前の雷袋の力を上げてくれるんだ」

パペッチュ「何それ？」

ピカコ「まぁ、あとで分かるって♪」

「ぢゃあな。」

パペッチュ「うん！」

ザッザッ　ザッザッ　ザッザッ　ザッザッ

パペッチュ「これ持ってるだけでパペッチュ強くなるんだぁ」

「にひひひひひ」

「それにしても虹色の玉ってどこにあるんだろぉ？」

「まっ♪　旅してたら分かるか♪」

「にゃははは」

ザッザッ　ザッザッ　ザッザッ　ザッザッ

「何だか暑くなってきたぁ」

「ん？看板があるぞ」

ザッザッ　ザッザッ　ザッザッ　ザッザッ　ザッザッ

「んー？」

“火の国（火山地帯）”

「ひのまち　かっこ　かやまぢたい？」

「何て読むか分かんないや」

「とりあえず、山があるから楽しいってことだ！」

「やっほ～！」

ダダダダダダダ

・・・・・・・・

ボロイ看板『“りゅ・こ・険”』

パペッチュ「ほんとに暑いなぁ」

「アイス欲しくなってきたよ・・・」

「お腹も減ってきたし」

ワニキチ「おいっ！　そこのポッチャリパンダ！　待ちな！」

パペッチュ「ん？　パペッチュのこと？」

ワニキチ「そおだお前だよ　へっ」

パペッチュ「パペッチュがどおしたの？」

ワニキチ「お前その背中に背負ってる鞄、何入れてるんだぁ？」

パペッチュ「パペッチュの旅の道具だよ？」

ワニキチ「金は何プーチ入ってんだぁ？　ひひ」

パペッチュ「1円だよ？」

ワニキチ「！？　1円？、お前みたいなやつが何でそんな大金持ってんだよ！」

パペッチュ「ピカチャンから貰ったの」

ワニキチ「ピカチャン？　誰だそいつ？・・・まぁいい、とりあえずその金渡しな！」

パペッチュ「嫌だよ、パペッチュこれないとご飯買えないもん」

ワニキチ「いいから貸せよ、その金をワニさんに持っていって俺は格を上げるんだ」

パペッチュ「そんなの知らないよ、誰かに貰ってこればいいぢゃん」

ワニキチ「だから今お前から貰おうとしてんぢゃねえか！」

パペッチュ「あっ！　なるほどね」

ワニキチ「お前頭イかれてんぢゃねえか？（笑）」

パペッチュ「君のほうこそね、ぢゃっ」

ザッザッ　ザッザッ

ワニキチ「待てや！」

パペッチュ「も～、しつこいな～」

「何？、」

ワニキチ「お前ウゼーンだよっ！」

ブンッ

パペッチュ「あぶな」

フッ

ワニキチ「！？　俺のパンチを避けやがった！？」

パペッチュ「そんな遅いパンチぢゃパペッチュは、倒せないよ。」

「ぢゃあね」

ワニキチ「んーーーー！！（怒）」

「ぶっ殺してやる！　ファイヤーボール！」

ボアッ！

パペッチュ「何だこの技！？　避けきれない！　くっ」

バンッ！

パペッチュ「うわっ」

ドダッ！

パペッチュ「く～、けっこお喰らった」

「技何て卑怯だぞ！　殴り合いで勝負だ！」

ワニキチ「何が卑怯だ　へっ　お前も技を使えばいいぢゃねえか」

「？　もしかして技の使い方も知らねえのか～？」

「それか技を使うエネルギーもねえとか？　ははっ」

パペッチュ「く～！　どおやって使うんだよ」

ワニキチ「やっぱり知らねえのか　へっ」

「お前はどこの種族か知らねえが、俺は火の種族だ」

「だから体ん中の心臓の横に火袋ってのがある」

「さっきの技はその火袋のエネルギーを使って口から火の玉を出したんだ」

「これで分かったか雑魚？　ははははは」

パペッチュ「く～ーーー」

ワニキチ「そしてその袋のエネルギーを、
　　フルに使える玉ってゆうのが、この世界にはあるんだ」

「その種族の選ばれた子にしか力を発揮しないらしいけどなぁ」

「そしてその玉を、持ってる中で俺が知ってんのが、
　りゅうこ様と、りゅうこ様の子供のジョーチュ様だ」

「火の国を代々守ってくれてるんだ、めちゃくちゃつえー人なんだぜ」

「まぁ、俺がどんなに説明したところで、
　お前みたいな雑魚には到底、袋の力は使えねえだろおな　ははは」

パペッチュ「心臓の横にある袋・・・」

ワニキチ「もしかしてエネルギーを練り上げてんのか？」

「お前ぢゃ無理だって（笑）」

「まぁコツだけ教えといてやるよ」

「とりあえず、ある程度エネルギーを練ったら、
　自分の心臓の横に袋があんのが分かるよおになるんだ」

「そんときに爆発させる感じかな？」

「まぁ、お前ぢゃ無理だって　へへ」

ヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂ

ワニキチ「！？、まさか？」

パペッチュ「こんな感じかな♪」

「ピカチャンが使ってた」

「これで勝てるぞー！」

ワニキチ「待て！　その手で俺を殴る気か！？」

パペッチュ「だってこれで殴ったら勝てるもん♪　あたりまえぢゃん」

「嫌だったら避けたらいいしね♪」

「よっしゃー！　とりゃあー！」

ダッ！

「サンダー　パーンチっ！」

ワニキチ「うわぁ！！！！！！！！！！」

バヂヂヂヂヂヂヂ！　バーン！

ワニキチ「う・・・う・・・う・・・あ・・・・・・・・・」

ドサ・・・

パペッチュ「ふぅ～　疲れた～」

「お腹減ったしご飯でも食べに行こ♪」

「あっ！　そおだ」

ザッザッ　ザッザッ

「気絶してるだけか、良かった」

「へっ　覚えとけっ！　パペッチュは雷族のパペッチュだッ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7639h/

ぷーち島

2010年11月13日14時33分発行